

その厳しさの中にある思い

「もう少しがんばれ」「腕を伸ばして」「立ったらいけん」・・・

水泳が始まったプールサイドから先生方の大きな声が聞こえてきます。

目標としていた距離を泳げた子に、プールサイドで見ていたみんなが拍手をおくる。「よく頑張った」。先生の励ましの言葉。息を弾ませながら泳ぎ切った後に見せる子どもの表情は、教師にとって何とも言えない最高の瞬間です。

教室を回っていると、時として厳しい指導の声が聞こえます。

「自分で考えて行動しなさい」「学習に関係のないおしゃべりはしません」「人のいやがることはしません」・・・

子どもたちの将来を考えると、今指導しておかなければならないことがたくさんあります。「自分で何とかできるようにさせたい」「自信をつけさせたい」「これは大人になっても大切なこと」こんな先生方の強い思いが伝わってきます。その厳しさの中には、これから進んでいく中学校やその先の進路のこと、そして大きく変化する社会の中で自分の力で生きていく子どもたちに、こうなしてほしいと願う強い思いがあるからです。

羽合小学校の広報誌にも書きましたが、私はこの細い体で、中学校から始めた部活を高校・大学とやっていました。中学校に入学した頃、体が大きく怖そうな柔道部の顧問の先生に呼び止められました。柔道着を着せられ「新入部員が入ったぞ」と半ば強制的に入部させられ、やりたいと思ったこともなかった柔道をする事になりました。当時、母校の柔道部は、全国大会に連続して出場している強い学校だとは知りませんでした。顧問の先生も先輩も優しくしたのは最初だけで、体がボロボロになるくらい、厳しい練習の毎日でした。辛くて、辛くて逃げ出そうとした(1年みんなでトイレに隠れた)ことも何度もあったのですが、試合に出るとなぜか勝ててしまう。それが自信となり、苦しい練習の意味を知りました。

「練習でできないことは試合ではできない」「自信は自分がどれだけ練習したかで生まれてくるもの」こんな言葉を顧問の先生は言っておられたのを覚えています。

「問題が解けた」「泳げる距離が伸びた」自分で努力を積み重ねていくことによって、学ぶ楽しさが分かり、自信となり、そして次のステップへ挑戦していく意欲とつながっていきます。

できないことに挑戦する気持ちやもっともっと上を目指すという向上心の基礎は、家庭生活や学校生活で培われるものだと思います。そして自分を応援してくれる仲間がいる、励ましてくれる家族がいる、信頼できる先生がいることは子どもたちにさらなる向上心を生み、心を強くしていきます。

学校を回っていて、頑張っている子どもたちの姿を見る

